

プロジェクト La Musica

シューベルト連作歌曲集

WINTERREISE D.911 op.89

冬の旅

Franz Schubert
Wilhelm Müller

バスバリトン 糸洲義人
ピアノ 鈴木千帆

2021年2月23日（祝）
ガルバホール新宿
Online 同時配信

糸洲義人 バス・バリトンリサイタル

歌曲集「冬の旅」 D.911 作品89
WINTERREISE D.911 op.89 (1827)
作曲：フランツ・シューベルト
Franz Schubert (1797-1828)
作詩：ヴィルヘルム・ミュラー
Wilhelm Müller (1794-1827)

バス・バリトン 糸洲 義人
ピアノ 鈴木千帆

2021年2月23日 14時開演
ガルバホール新宿

主催：プロジェクト La Musica
後援：NPO 音のいぶき
BJSV美しい日本の歌と声

- ☆「冬の旅」は連作歌曲集である。ドイツ語ではLiederzyklusもしくは Liederkreisという。各曲の間で文学的・音楽的に関連性を持たせた歌曲集である。
なおzyklusという言葉は元来「循環」という意味をもっている。
- ☆「冬の旅」の構成要素（詩的側面から）：自然・人間・神・抽象・哲学
- 1～12番**・・・比較的事実に基づいた情景描写と旅人の心象風景について語られる。遍歴職人としてこの地にやってきた主人公は、結局受け入れられず放浪の旅に出るが、12番の「孤独」で悲痛な叫び「elend」を発する。elendの語源は、in der Fremd（異国をさすらう）や（故郷を追われた）の意味があり、第一曲の冒頭Fremdに回帰循環する。
- 13～24番**・・・事実性は抽象化され、生と死を哲学的に見つめる内容となり、第一部を注釈する内容になっている。果たして不幸な旅人はどこへ向かうのか？

WINTERREISE D.911 OP.89

冬の旅

- | | |
|--------------------|-------|
| 1. Gute Nacht | おやすみ |
| 2. Die Wetterfahne | 風見の旗 |
| 3. Gefrorne Tränen | 凍った涙 |
| 4. Erstarrung | 凝固 |
| 5. Der Lindenbaum | 菩提樹 |
| 6. Wasserflut | あふるる涙 |
| 7. Auf dem Flusse | 川の上で |
| 8. Rückblick | 顧み |
| 9. Irrlicht | 鬼火 |
| 10. Rast | 休息 |
| 11. Frühlingstraum | 春の夢 |
| 12. Einsamkeit | 孤独 |

Pause 休憩

- | | |
|---------------------------|-------|
| 13. Die Post | 郵便馬車 |
| 14. Der greise Kopf | 白髪の頭 |
| 15. Die Krähe | 鴉 |
| 16. Letzte Hoffnung | 最後の希望 |
| 17. Im Dorfe | 村で |
| 18. Der stürmische Morgen | 嵐の朝 |
| 19. Täuschung | 幻覚 |
| 20. Der Wegweiser | 道標 |
| 21. Der Wirtshaus | 旅籠 |
| 22. Mut | 勇気 |
| 23. Die Nebensonnen | 幻の太陽 |
| 24. Der Leiermann | 辻音楽師 |

<お客様にお願い>

本日の演奏会は前半に12曲、短い休憩をはさんで後半に12曲を、それぞれ続けて演奏いたします。恐れ入りますが、曲と曲との間での拍手はなさないようお願いいたします。

休憩時にコロナ対策として換気のためドアをあげ放ちます。ご協力願います。

Greeting <ごあいさつ>

本日はお忙しい中、「冬の旅」コンサートにお越しいただき、またOnlineでご視聴いただき厚く御礼申し上げます。

コロナ禍で全てに閉塞感がある今日、音楽家も自粛を強いられ発表の機会や練習の機会が奪われてきました。その中であって、La Musica主宰、ピアニストの鈴木千帆氏から本企画の提案がなされ、こういう時期だからこそこの人生の縮図ともいえる「冬の旅」を演奏する意味を見出し、今日を迎えることになりました。

5回目の「冬の旅」です。1989年の初リサイタル以来、人生の節目でこの偉大な歌曲集を歌ってきました。私の人生に於ける危機の時、この歌曲集は私に大いなる勇気を与えてくれました。また東日本大震災の時も、20年の歌唱ブランクを乗り越えてこの歌曲集を歌うことにより被災者の皆様にエールを送ることが出来ました。そして今、新型コロナ感染症による未曾有の危機の時に、「冬の旅」を演奏することが出来ることに私なりの運命的なものを感じます。後期高齢者の仲間入りをした今、皆様への強いメッセージになることを信じ念じつつ、真摯に演奏いたします。また、今回はじめてコンサート終了後に、“「冬の旅」よもやま談義”と称する催しも開催することにしました。本日は、ここまで研究・精進を続けてきた「冬の旅」を、自然に柔らかくより普遍的に、鈴木千帆さんのピアノに支えられて表現したく思います。つらく悲しく厳しい「冬の旅」ではありますが、皆様にとって心地よい音楽空間でありますように、精一杯努めます。

糸洲 義人

私の育った日本の神奈川では、冬の青く澄んだ空や冷たく乾いた風はむしろ好ましいものです。雪に覆われた富士山のシルエットはどれだけ見ても見飽きない、冬ならではの美しい情景。幼い頃に踏んで歩いた霜柱。わずかに降った雪をかき集め、心を浮き立たせながら雪だるまにつくり上げた思い出は格別です。

かたや冬の旅。心に痛手を負って冬を旅するこの若い旅人の目に映る世界はなんと違っていることでしょう。空を覆いつくす暗い雲。身を苛む雪と氷、吹きすさぶ冷たい風。美しすぎるがゆえに心を痛めつける愛の思い出。望みを失い寄る辺なくさまよう己が身。

ドイツ歌曲に憧れつつもイタリアの作曲家の作品を学ぶ機会の多かった私にはなかなか実感しにくかった作品でしたが、ご指導くださったある先生のお言葉に目を開かれました。

「イタリアの作品とドイツ音楽では、空の高さが違う。イタリアはどこまでも青く澄み切って高く、何の曇りもない。でもドイツでは黒い雲が低く、重く垂れこめている」

頭上に広がる天の、歩む大地の、なんという違い。目の前に広がる世界は自分などに目もくれないというのに、悲しみに満ちた心を抱えてそこへ踏み出していかなければならない。それも、今すぐに。

「全曲演奏した時に初めて見える世界がある」と言われる作品、冬の旅。歌手にとっても、またピアニストにとっても特別な作品です。演奏できるということがとても幸せなんだ、と目を潤ませながら語り激励して下さった先生。今日の演奏を、天の高きへと旅立たれた先生に心からの感謝と共に捧げます。

鈴木千帆



糸洲 義人 (いとす・よしと) バス・バリトン

1968年早稲田大学理工学部卒業。在学中より合唱団の代表やソリストを務め、その後も仕事の傍ら声楽研鑽を続け合唱公演、オペラ公演へ数多く出演。歌曲リサイタルを多数開催。シューベルト「冬の旅」をライフワークとし、2016年みなとみらい小ホールでの第4回目となる「冬の旅」リサイタルは、世界的ピアニスト杉谷昭子氏の共演を得、好評を博す。2017年奏楽堂日本歌曲コンクール審査員特別賞。2019年BJSV (美しい日本の歌と声/Beautiful Japanese Songs & Voices) を設立し代表に就任。日本語を学ぶ外国の青少年たちへ、美しい日本の歌と日本語を届ける活動に着手。関屋晋氏に合唱を、大西多恵子・山本有希子の両氏に声楽を、尾上和彦氏にオペラ舞台芸術を、エルンスト・ザイラー、川崎・ヴァイセンボルン・操の両氏にドイツリート解釈と演奏法の指導を受けた。

いらか会・三月会会員、松原混声合唱団団友、L i e d研究会主宰、平塚稲門会HTコール指導、音楽振興NPO「音のいぶき」監事。音楽振興団体「美しい日本の歌と声」代表。



鈴木千帆 (すずき・ちほ) ピアノ

国立音楽大学器楽科ピアノ専攻卒業。東邦音楽総合芸術研究所伴奏法専攻修了。日本声楽家協会・コレペティトル専科にて研鑽。

加藤福子、山内悠子、池澤朗子、川崎ヴァイセンボルン操、ケマル・ゲキチの各氏にピアノを、白石隆生、久邇之宜、森島英子、V.スカレーラ、阪口直子の各氏にピアノ伴奏法・音楽解釈を学ぶ。1998年、2001年サンタ・マルゲリータ・リグレ国際オペラセミナー (伊) に演奏助手として参加。2000年にはサバウディア夏季音楽アカデミー (伊) にて演奏助手を務めると共にN.ボナヴォロンタ氏によるオペラ解釈・ピアノマスタークラスを修了するなど国内外の音楽セミナー・オペラ公演等に参加。また15年余にわたり松本美和子氏、G.パスティネ氏のアシスタントを務め、ベルカント発声法、イタリア音楽の演奏解釈について研鑽を積む。日本声楽家協会主催・二台ピアノによるオペラ全曲演奏会 (演奏会形式)、歌曲研究会等に多数参加。ソロのみならず声楽の伴奏を中心としたアンサンブルで幅広く演奏活動を行い数多くのソリストと共演。後進、また声楽や合唱指導等にも活動の場を広げている。

日本演奏連盟、平塚音楽家協会、NPO音のいぶき各会会員。プロジェクトLa Musica、鈴木千帆音楽教室主宰。

解 説

「冬の旅」の曲順と与える性格についての考察

糸洲 義人

「冬の旅」の最も大きなミステリーは、ミュラーの原詩の順番とシューベルトの作曲した曲の順番が大きく違うということであろう。以下は私見である。

次ページの曲順比較表を見て欲しい。詩の順番と曲の順番をただ比較しただけでは何も浮かび上がってこない。ポイントは、後から作詩された12詩が詩集にどのように挿入されたかを調べることにあった。即ち、ミュラーは後から作詩した12詩と最初に作詩した12詩をシャッフルして24詩に仕上げたわけではなかった。

ウラーニアに発表された最初の12詩（シューベルトは第一部としてこの順番通りに作曲した。）の順番は24詩になっても変わっていない、言い換えれば、ミュラーは追加した12詩を第一部の12詩の順番を入れ替えずに挿入し、「遍歴ホルン吹き の遺稿詩集[2]」の詩集の中に納めて発表したのである。

特に注目したいのは、8番Rückblickと9番Irrlichtの間に、八つもの詩が挿入されていることである。シューベルトの歌曲集でいえば14番から21番までの詩である。8番で「恋人のいる町を顧みたい」と願い未だ恋人のことに連綿と執着していた旅人は、9番で突如として「哲学的解脱の境地」に至ったかのように、「全ての喜びも苦しみも鬼火の戯れのなすものであり、どの道を選ぼうともいずれは目的地にたどり着くのだ。」という境地に至る。ミュラーの最終詩集ではこの境地に至るまでの旅人の想念が、特に自己と社会を対比することによる絶望的な疎外感として、8番の後に八つの詩として語られるのである。（シューベルト歌曲集では、14番～21番であるが、ミュラーの最終詩では9番～16番となる。

歌曲集「冬の旅」第一部（1～12番）では恋人への想いが語られていた。しかし、第二部（13～24番）ではほとんど恋人のことは出てこずに、社会と個人の対比、旅人の疎外感に代表される内的心象が語られ続けるのである。それは、死へのあこがれともいえる一種異様な世界である。

そもそも、「冬の旅」は12番Einsamkeitが終曲なのであろう。日本女子大名誉教授 西山力也氏によれば、12番の最後に心の叫びとして発せられる「elend」という言葉は、一般的に「惨めな」と訳されるが、もともとの語源は、「故郷を追われた、異国をさすらう」という意味合いを持つのだという。このelendという心の叫びが、実は1番Gute Nachtの冒頭の「fremd」「よそ者」即ち「疎外された者」に立ち返っていく。この詩の原点はこの部分にこそあるのだと私は思う。

さて、ミュラーの24詩の順番をもう一度見てみよう。Einsamkeit は、なんと22番目に位置しており、そのあとにMutとDer Leiermannが続いて連作詩を閉じている。私は思うが、ミュラーはこの旅人を生かしてこの詩集を閉じたかったのではないかと思う。もう一つの歌曲集「美しき水車屋の娘」では、失恋した若者は絶望して簡単に死んでしまう。「冬の旅」ではそうならなかった。詩集の22番目にEinsamkeitでelendと絶望しfremdに回帰するはずの若者であったが、23番目のMutですさまじい元気を出し「神がいそうもないのなら、われ等自ら神々となろう！」とまで宣言し、唯一神への反抗まで示唆している。そして最終詩Der Liermannでは、すべてを超越したかのような老楽師を登場させ、「一緒に私の歌に合わせてライアー(手回しオルガン。ハーディガーディ説はとらない)を奏でてくれ」と旅人は言う。この一連のつながりはあくまでも生への希求ではないかと私は思う。

さて、ミュラーはそのように詩集を作ったと考えるが、我がシューベルトは第一部12曲の作曲をしたあとで初めて追加挿入された12詩を含む24詩の存在を知ったことになる。詳細な分析は研究家の皆様に任せるとし、私は単に時系列的な事実を受け入れて、シューベルトは出版間近であった第一部（1～12曲）の詩を入れ替えることなどできなかったのだらうと思う。自筆譜には12曲目にFineとサインしているから第一部はその時点では完結していたのだと考える。また、のちに作曲された第二部の自筆譜では曲順は1番から始まっていることから裏付けられる。当初、第1曲Gute Nachtと第12曲Einsamkeitの調性が同一であったことも回帰循環することを裏付けている。シューベルトは24詩の存在を知った時に、Einsamkeitを短三度低く移調し、13番以降の第二部への布石としたことも知られている。（循環をせずに第2部へつづけるための布石。）

第一部作曲の後に付加された12詩の存在を知ったシューベルトは、加えられた詩の順序どおりに第二部を作曲したと思われる。私が思うに、シューベルトは第一部をそのまま生かして、加えられた12詩を第二部として作曲するには、まさに「前門の虎と後門の狼」という心境であったのではないかと思います。しかしシューベルトは見事にこの問題を解決し、普遍的な連作歌曲集として残してくれた。

第二部の曲順はミュラーが加えた詩の順番通りであるが、Die Nebensonnen と Mut! の順番をシューベルトは入れ替えた。ミュラーの付け加えられた詩の順番通りで作曲すると、歌曲集はDie Nebensonnen が22番目でMut! は23番目となる。元気の良い Mut! が最終曲の前に来てしまうことになる。これはシューベルトが目指した「冬の旅」の音楽性にそぐわなかったと考えられる。

詩集としてのみ考えたとき、ミュラーの24詩の順番は非常に納得がゆくものである。なぜなら最終詩ではEinsamkeit が22番目にあり、ここでチクルスとしての循環が完成し、Mut! と Der Leiermann はエピローグとして位置づけられるからである。

しかし、シューベルトは最終詩Der Leiermannの一つ前に位置していたMutを22曲目にしてDie Nebensonnenを23曲目にしたのである。ここに私はシューベルトの天才を見る。詩を入れ替えたことにより、終曲の詩の性格が変わり死への希求と生への希求のどちらにも解釈できることになったのだと思う。結果として歌曲集の第二部に配置せざるを得なかった12の詩は、恋人への想いは影をひそめ、社会からの疎外感を背景とした死と生との対話という性格を色濃く出すことになった。もし、シューベルトの順番で24詩が出版されたとしたら詩集としてはあまり芳しいものではないと思う。

しかし、シューベルトはそれらの詩に素晴らしい音楽を与え、命を吹き込み200年たった今でも我々を魅了し続ける「歌曲集」として「冬の旅」を残してくれた。今この歌曲集を歌う人間として思うことは、「シューベルトが作ったこれらの一曲一曲とその順番はこれ以外にはない」という思いである。このような素晴らしい歌曲集を残してくれたシューベルトに感謝し、心から愛するものである。

曲順	シューベルト	ミュラー	
①	Gute Nacht(おやすみ)	Gute Nacht(おやすみ)	①
②	Die Wetterfahne(風見の旗)	Die Wetterfahne(風見の旗)	②
③	Gefrorene Tränen(凍った涙)	Gefrorene Tränen(凍った涙)	③
④	Erstarrung(凝固)	Erstarrung(凝固)	④
⑤	Der Lindenbaum(菩提樹)	Der Lindenbaum(菩提樹)	⑤
⑥	Wasserflut(あふるる涙)	Die Post(郵便馬車)	13
⑦	Auf dem Flusse(川の上で)	Wasserflut(あふるる涙)	⑥
⑧	Rückblick(顧み)	Auf dem Flusse(川の上で)	⑦
⑨	Irrlicht(鬼火)	Rückblick(顧み)	⑧
⑩	Rast(休息)	Der greise Kopf(白髪の間)	14
⑪	Frühlingstraum(春の夢)	Die Krähe(鴉)	15
⑫	Einsamkeit(孤独)	Letzte Hoffnung(最後の希望)	16
13	Die Post(郵便馬車)	Im Dorfe(村で)	17
14	Der greise Kopf(白髪の間)	Der stürmische Morgen(嵐の朝)	18
15	Die Krähe(鴉)	Täuschung(幻覚)	19
16	Letzte Hoffnung(最後の希望)	Der Wegweiser(道標)	20
17	Im Dorfe(村で)	Das Wirtshaus(旅籠)	21
18	Der stürmische Morgen(嵐の朝)	Irrlicht(鬼火)	⑨
19	Täuschung(幻覚)	Rast(休息)	⑩
20	Der Wegweiser(道標)	Die Nebensonnen(幻の太陽)	23
21	Das Wirtshaus(旅籠)	Frühlingstraum(春の夢)	⑪
22	Mut(勇気)	Einsamkeit(孤独)	⑫
23	Die Nebensonnen(幻の太陽)	Mut(勇気)	22
24	Der Leiermann(辻音楽師)	Der Leiermann(辻音楽師)	24

☆ 丸数字は最初に発表された詩の順序（第一部）でシューベルトは順番通りに作曲した。

☆ ミュラーが追加した詩は、第一部の詩の間に挿入されていて第一部の詩の順番は変わっていない。

☆ シューベルトは第一部は詩の順番を全く変更せず、第二部もわずかにMutとDie Nebensonnenの順序を入れ替えた。

Winterreise 冬の旅

Gedichte von Wilhelm Müller

詩 ヴィルヘルム・ミュラー

対訳・解説 : 糸洲 義人

1. Gute Nacht

おやすみ

「冬の旅」の第一曲目であり、冒頭ピアノがこの曲集の全編を暗示するかのように、悲しいメロディーと歩行のテンポを奏でるだけでなく、この歌曲集のテーマといえる「疎外感」を表現する。

歌い手は、ピアノに支えられながら、旅に出なければならなかった状況を語る。忘れがたい乙女への想いを断ち切れずに一人深夜、白い荒野をけもの道をたどって冬の旅を始めるのである。

冒頭のFremdという言葉と断ち切れない想いの Gute Nacht が重要。

Fremd bin ich eingezogen,
Fremd zieh'ich wieder aus.
Der Mai war mir gewogen
Mit manchem Blumenstrauß.
Das Mädchen sprach von Liebe,
Die Mutter gar von Eh'.
Nun ist die Welt so trübe,
Der Weg gehüllt in Schnee.

他所（よそ）からやってきた私は、
よそ者としてまた去ってゆく。
あんなに優しかった五月
たくさんの花々にあふれていた。
乙女は恋を語り、
その母は結婚さえも口にした。
だがいま 世界はこんなにも暗く悲しく、
道は雪に覆われている。

Ich kann zu meiner Reisen
Nicht wählen mit der Zeit,
Muß selbst den Weg mir weisen
In dieser Dunkelheit.
Es zieht ein Mondenschatten
Als mein Gefährte mit,
Und auf den weißen Matten
Such ich des Wildes Tritt.

旅立たなければならぬ私には
時を選ぶことなど許されない、
辿る道さえも見つけなければならぬ
こんな暗闇の中なのに。
月が照らしたず影法師だけが
私に寄りそう道連れ、
そして白く雪に埋もれた広野に
獣たちの足跡を辿るのだ。

Was soll ich länger weilen,
Daß man mich trieb'hinaus,
Laß irre Hunde heulen
Vor ihres Herren Haus.
Die Liebe liebt das Wandern,
Gott hat sie so gemacht,
Von Einem zu dem Andern,
Fein Liebchen, gute Nacht.

ここにこれ以上留まる必要があるのか、
彼らはどのみち私を追い出すのだ、
気のふれた犬どもは吠えさせておけばよい
ご主人さまの家の前で。
愛はうつろいやすいもの、
神がそのようにおつくりになった、
ある人からまた別の人へと、
愛しい恋人よ、さらば おやすみ。

Will dich im Traum nicht stören,
Wär schad'um deine Ruh,
Sollst meinen Tritt nicht hören,
Sacht, sacht, die Türe zu.
Schreib im Vorübergehen
Ans Tor dir: gute Nacht,
Damit du mögest sehen,
An dich hab ich gedacht.

きみの夢の邪魔をしないように、
きみのまどろみを妨げないように
きみに私の足音を聞かれないよう、
そっと そっと ドアを閉めよう。
去りゆくときに書きとめよう
きみの家の門に「おやすみ」と、
きみがそれを見てわかってほしいのだ、
私がきみを想っていたということ。

2. Die Wetterfahne

風見の旗

6/8拍子で風が吹き荒れて「風見」をピューピューと鳴らす。この風は家の中の人々の心とも戯れるが、揺れ動く旅人の心をこそ本当は表現しているのだろう。この風はまた「神」をも暗示する。恋に破れただけでなく、宗教の違い（プロテスタントとカトリック）が疎外を引き起こすのか？

Der Wind spielt mit der Wetterfahne
Auf meines schönen Liebchens Haus:
Da dacht'ich schon in meinem Wahne,
Sie piff'den armen Flüchtling aus.

風が風見の旗と戯れている
愛する美しい恋人の家の屋根で：
妄想にとらわれた私は思った、
旗は哀れな逃亡者を嘲っているのではないか。

Er hätte es eher bemerken sollen
Des Hauses aufgestecktes Schild,
So hätte er nimmer suchen wollen
Im Haus ein treues Frauenbild.

もっと早く気づくべきだったのさ
この家の上に掲げられた 標（しるし）に、
そうすれば見つけようとはしなかったのだ
この家に誠実な乙女の姿など。

Der Wind spielt drinnen mit den Herzen,
Wie auf dem Dach, nur nicht so laut.
Was fragen sie nach meinen Schmer-
zen ?

風は家の中でも人々の心と戯れている、
屋根の上でと同じように、だが騒々しくは無く。
なぜあの人たちが私の苦しみを気かけようか？

Ihr Kind ist eine reiche Braut.

彼らの娘は金持ちに嫁ぐ花嫁なのだ。

3. Gefrorne Tränen

凍った涙

あたりは雪と氷で凍てついている。ピアノ部のスタッカートと裏拍に現れるアクセントは足取りの乱れを表しているかのようだ。主人公は知らず頬を伝う涙が冷たく凍り付いていくさまに悲嘆する。我が涙よ！ 胸から溢れ出たときはあんなに熱くたぎっていたのに。

Gefrorne Tropfen fallen
Von meinen Wangen ab:
Ob es mir denn entgangen,
Daß ich geweinet hab ?

凍てつきたいくつもの雫が
私の頬からつたい落ちる：
私はいったい気づかなかったのか、
私自身が泣いたということに？

Ei Tränen, meine Tränen,
Und seid ihr gar so lau,
Daß ihr erstarrt zu Eise,
Wie kühler Morgentau ?

ああ 涙よ 私の涙よ、
おまえはどうしてそんなに冷めてしまったのか、
氷になって固まってしまうのか、
冷たい朝露のように？

Und dringt doch aus der Quelle
Der Brust so glühend heiß,
Als wolltet ihr zerschmelzen
Des ganzen Winters Eis.

この胸の泉から ほとばしり出た時は
灼熱のごとくたぎって、
融かし尽くすほどだったではないか
この冬の氷全てを。

4. Erstarrung

凝固

第三曲で熱い涙が凍り付いていく予感に震えた旅人は、この第四曲では昔恋人とそぞろ歩いた緑の草原（今は一面雪と氷に覆われている）に赴き、熱き我が涙と口づけで雪を溶かしつくしたいと願う。しかし、恋人の面影は我が心に凝固しており決して溶け去らないことに気付くのである。4/4拍子であるがテンポは速く、ピアノは最初から最後まで三連符を刻み続ける。あたかも旅人の心臓が早鐘のように打っているかのようなようである。そしてピアノバスパートに時折あらわれる不吉な三連符は死を予感するかのようである。

Ich such im Schnee vergebens
Nach ihrer Tritte Spur,
Wo sie an meinem Arme
Durchstrich die grüne Flur.

私は雪の中を空しく探す
あの娘の残した足跡を、
彼女が私の腕にすがり
そぞろ歩いた緑の野原に。

Ich will den Boden küssen,
Durchdringen Eis und Schnee
Mit meinen heißen Tränen,
Bis ich die Erde seh.

私は大地に口づけしよう、
氷と雪を貫きとおしたいのだ
私のかくも熱い涙で、
大地の土が見えるまで。

Wo find' ich eine Blüte,
Wo find' ich grünes Gras ?
Die Blumen sind erstorben
Der Rasen sieht so blaß.

花はどこに見出せるのか、
緑の草はどこにあるのか？
花々は枯れはて
芝生はあんなに色褪せて見える。

Soll denn kein Angedenken
Ich nehmen mit von hier ?
Wenn meine Schmerzen schweigen,
Wer sagt mir dann von ihr ?

いったい一つの思い出さえも
ここから持ち去ってはならないのか？
私の苦しみが沈黙してしまったら、
誰が彼女のことを私に語ってくれるのか？

Mein Herz ist wie erfroren,
Kalt starrt ihr Bild darin:
Schmilzt je das Herz mir wieder,
Fließt auch ihr Bild dahin.

私の心は凍り付いてしまったかのよう、
その中で彼女の面影が冷たく凍りついている：
この心がいつの日か再び溶けたならば、
彼女の姿も流れていってしまうだろう。

5. Der Lindenbaum

菩提樹

24曲中最もよく知られた曲であり、11番「春の夢」と同じように抒情的な曲である。この曲だけを取り出して民謡調に仕立て上げられた「菩提樹」が日本人にはおなじみである。

しかしながら、「冬の旅」における5番目の曲「菩提樹」は優しく美しく抒情的であっても、旅人を「やすらぎ＝死」に誘う魔性の囁きであるかもしれない。

Lindenbaumを「菩提樹」と訳したが、釈迦がその下で悟りをひらいたとされる「インドボダイジュ（クワ科）」とは違い、「セイヨウボダイジュ（シナノキ科）」を指す。

Am Brunnen vor dem Tore,
Da steht ein Lindenbaum,
Ich träumt' in seinem Schatten
So manchen süßen Traum.

市門の外の井泉のそばに、
一本の菩提樹がたっている、
私はその木蔭で夢見たものだ
とても沢山の甘美な夢を。

Ich schnitt in seine Rinde
So manches liebe Wort;
Es zog in Freud und Leide
Zu ihm mich immer fort.

私はその幹に刻み付けたものだ
たくさんの愛の言葉を；
嬉しい時も悲しい時も惹きつけられた
いつもその菩提樹に。

Ich muß't auch heute wandern
Vorbei in tiefer Nacht,
Da hab ich noch im Dunkeln
Die Augen zugemacht.

私は今日も通り過ぎなければならなかった
真夜中にその菩提樹のそばを、
あたりはまだ暗闇の中だったが
私は眼を閉じたのだ。

Und seine Zweige rauschten,
Als riefen sie mir zu:
Komm her zu mir, Geselle,
Hier findest du deine Ruh.

すると菩提樹の枝々がざわめいた、
私に呼びかけるかのように：
おいでなさい 友よ、
ここに君の安らぎがあるのだよ。

Die kalten Winde bliesen
Mir grad ins Angesicht,
Der Hut flog mir vom Kopfe,
Ich wendete mich nicht.

冷たい風が吹き付けてきた
私の顔に真正面から、
帽子が頭から飛び去ったが、
私は振り返らなかつた。

Nun bin ich manche Stunde
Entfernt von jenem Ort,
Und immer hör ich's rauschen:
Du fändest Ruhe dort !

今はもう随分と時間が過ぎ
あの場所から遠く離れてしまった、
だが私にはまだあの枝々のざわめきが聞こえる：
君の安らぎはここにあるのだよ！

6. Wasserflut

あふるる涙

4番「凝固」での「死の影」の兆しは、5番「菩提樹」で「死への優しい誘い」となり、遠く離れた今でも旅人は離れた地を想い、とめどなく涙し6番「あふるる涙」に至る。

旅人の想いと大自然の関係に注目したい。あふれた涙は雪に吸い込まれ春風は雪を溶かし、若草は萌えいでて、涙を伴った雪解け水は小川となって恋人の住む街に流れゆき、想いを込めた涙は恋人の家の前で熱くたぎるのである。もちろん、願望である。

Manche Trän' aus meinen Augen
Ist gefallen in den Schnee;
Seine kalten Flocken saugen
Durstig ein das heiße Weh !

たくさんの涙が私の眼（まなこ）から
雪の中にこぼれ落ちた；
冷たい雪の塊は貪るように
熱い悲しみを吸い尽くす！

Wenn die Gräser sprossen wollen,
Weht daher ein lauer Wind,
Und das Eis zerspringt in Schollen,
Und der weiche Schnee zerrinnt.

若葉が萌え出ようとするときは、
暖かい風が吹いてくる、
そして氷の塊は砕けちり、
柔らかい雪も融けて流れさる。

Schnee, du weißt von meinem Sehnen:
Sag, wohin doch geht dein Lauf ?
Folge nach nur meinen Tränen,
Nimmst dich bald das Bächlein auf.

雪よ おまえは私の憧れを知っていよう：
言ってくれ どこへ流れて行くのか？
私の涙について行っておくれ、
すぐに小川がお前を迎えてくれる。

Wirst mit ihm die Stadt durchziehen,
Muntre Straßen ein und aus ——
Fühlst du meine Tränen glühen,
Da ist meiner Liebsten Haus.

おまえは小川とともにあの街を流れてゆき、
さんざめく街路を通り抜けながら——
もし私の涙が熱くたぎるのを感じたら、
そこそが私の愛する人の家なのだ。

7. Auf dem Flusse

川の上で

春になったときへの希望を込めて旅人は涙した。しかし、その頼みとする小川も現実には完全に凍り付き、自分の心は身じろぎもせずに川底に横たわっている。氷に空しく恋人との思い出を刻み込む旅人。だが凍り付いた川底でもわが心は熱くたぎっているのではないか？

Der du so lustig rauschtest,
Du heller, wilder Fluß,
Wie still bist du geworden,
Gibst keinen Scheidegruß !

お前、あんなに陽気にざわめき流れていた、
澄みきった奔放な流れよ、
どうして押し黙ってしまったのだ、
別れの挨拶のひとつもないとは！

Mit harter, starrer Rinde
Hast du dich überdeckt,
Liegst kalt und unbeweglich
Im Sande ausgestreckt.

固い殻（氷）でしっかりと
お前は自分を覆ってしまった、
冷たく身じろぎもせずに横たわっている
砂の中に身を伸ばして。

In deine Decke grab ich
Mit einem spitzen Stein
Den Namen meiner Liebsten
Und Stund und Tag hinein:

お前の氷の覆いに私は刻み込むよ
尖った石でもって
愛する人の名前を
それに時と日を：

Den Tag des ersten Grußes,
Den Tag, an dem ich ging;
Um Nam und Zahlen windet
Sich ein zerbrochener Ring.

初めて挨拶を交わした日、
私が立ち去ったあの日；
名前と数字の周りに絡みつくように囲む
途切れ途切れのリング。

Mein Herz, in diesem Bache
Erkennst du nun dein Bild ? ——
Ob's unter seiner Rinde
Wohl auch so reißend schwillt ?

我が心よ この小川の中に
今己の姿を認めるのか？
その氷の殻の下で
我が心もまた激しく昂ぶっているのではないのか？

8. Rückblick

顧 み

7番で別離を決意したが、川の底では激流が渦巻き我が心の状態と覚え、去ったあの街を回顧せざるを得ない旅人である。カラスどもに追われ逃げるようにあの町を出た。初めて来たとき街は何と優しく迎えてくれたことか。あの子の二つの目は情熱に燃えていたのに。旅人はふらふらと戻ってあの娘の家の前にたたずみたい。この曲は旅人の過去を集大成したかのようである。以降過去の言及はない。

Es brennt mir unter beiden Sohlen,
Tret ich auch schon auf Eis und Schnee,
Ich möcht nicht wieder Atem holen,
Bis ich nicht mehr die Türme seh,

両足の裏が燃えるように熱い、
氷雪をずっと踏みしめているのに、
私は再び息をつきたくない、
あの塔が見えなくなるまで。

Hab mich an jeden Stein gestoßen,
So eilt'ich zu der Stadt hinaus;
Die Krähen warfen Bäll und Schloßen
Auf meinen Hut von jedem Haus.

石という石に 躓きながら、
街から外へ急いで出た ;
カラスどもが雪や雹のつぶてを投げつけた
家々から私の帽子めがけて。

Wie anders hast du mich empfangen,
Du Stadt der Unbeständigkeit,
An deinen blanken Fenstern sangen
Die Lerch und Nachtigall im Streit.

なんと違った仕方でお前は私を迎えてくれたことか、
移り気な街よ、
お前の輝く窓辺で歌っていたね
雲雀とナイチンゲールが競い合って。

Die runden Lindenbäume blühten,
Die klaren Rinnen rauschten hell,
Und, ach, zwei Mädchenaugen glühten,
Da war's gescheh'n um dich, Gesell.

こんもりした菩提樹は花咲き、
清らかな小川は明るくせせらいで、
そして ああ あの娘の二つの瞳は情熱に燃えていた、
若者よ あの時 心を奪われてしまったのだね。

Kömmt mir der Tag in die Gedanken,
Möcht ich noch einmal rückwärts sehn,
Möcht ich zurücke wieder wanken,
Vor ihrem Hause stille stehn.

あの日のことが心に浮かんでくると、
もう一度後ろを振り返ってみたくなくなってしまふ、
私はまたよろめき戻って行って、
彼女の家の前に黙って佇んでみたくなる。

9. Irrlicht

鬼 火

もはや引き返すすべもなくなった旅人は、怪しく誘うIrrlicht（鬼火）に従い、干上がった深い谷底へと降りてゆく。今まで川は凍っていても水はあった。しかし、今や流れる水も完全に干上がり、救いは全くない絶望の極地へ足を踏み入れた。人々の喜びも苦しみも鬼火の仕業なのだ。明らかに死と対峙した旅人は、ある種の諦観を得たかのようである。初めてGrab（墓）という言葉が出てくる。いよいよ死との対話が始まる。

In die tiefsten Felsengründe
Lockte mich ein Irrlicht hin:
Wie ich einen Ausgang finde ?
Liegt nicht schwer mir in dem Sinn.

奥深い岩間の谷底へと
一筋の鬼火が私を誘いこんだ：
どうやって出口を探すかだつて？
そんなことは大して気にかけることではない。

Bin gewohnt das irre Gehen,
'S führt ja jeder Weg zum Ziel:
Unsre Freuden,unsre Wehen,
Alles eines Irrlichts Spiel.

道に迷うことには慣れてしまった、
どんな道でも目的地には通じるものだ：
私たちの喜びも私たちの苦しみも、
全ては鬼火の戯れなのだ。

Durch des Bergstroms trockne Rinnen
Wind ich ruhig mich hinab —
Jeder Strom wird's Meer gewinnen,
Jedes Leiden auch sein Grab.

干上がった溪流の跡を辿り
曲がりくねりながら私は落ち着いて下っていく…
どんな流れもやがて海に到達するように、
どんな苦しみもいつかは終わるのだ。

10. Rast

休息

ひたすら歩き続けてきた旅人は、とある炭焼き小屋に避難し休息をとろうとする。しかし、疲れすぎていて休もうと思っても休めない。つらい旅や歩行の中にしか、自らのやすらぎはないと気づく。

Nun merk ich erst, wie müd ich bin,
Da ich zur Ruh mich lege;
Das Wandern hielt mich munter hin
Auf unwirtbarem Wege.

自分がどんなに疲れているか、今はじめて気がつく、
休もうと身を横たえる時に；
この旅の間私の心は健気に耐えてきた
どんなにつらい旅路であっても。

Die FüÙe frugen nicht nach Rast,
Es war zu kalt zum Stehen,
Der Rücken fühlte keine Last,
Der Sturm half fort mich wehen.

足は休息を求めなかった、
立ち止まるには寒すぎたのだ、
背中は荷物の重みを感じなかった、
激しい風が歩みを後押ししてくれたから。

In eines Köhlers engem Haus
Hab Obdach ich gefunden;
Doch meine Glieder ruhn nicht aus:
So brennen ihre Wunden.

炭焼きの狭い小屋に
一夜の避難場所を見つけた；
だが私の手足は休まらない；
傷が燃えるように痛むのだ。

Auch du, mein Herz, in Kampf und Sturm
So wild und so verwegen,
Fühlst in der Still erst deinen Wurm
Mit heißem Stich sich regen.

あゝ、我が心よ お前は戦いや嵐の中で
あれほど勇猛果敢だったのに、
静けさの中で初めてお前に巣食う蟲がうごめき
自分を刺す鋭い痛みを感じるのか。

11. Frühlingstraum

春の夢

炭焼き小屋で一晩を過ごした旅人は春の夢、恋人との至福の夢を見る。しかし、雄鶏があちこちで時を作ると目が覚め現実に戻り、絶望の極地のあきらめへとつながる。夢→覚醒→現実 の3節からなる有節歌曲である。氷の花とは、窓ガラスに張った花模様の氷であろう。

Ich träumte von bunten Blumen,
So wie sie wohl blühen im Mai,
Ich träumte von grünen Wiesen,
Von lustigem Vogelgeschrei.

私は色とりどりの花の夢を見た、
まるで五月に咲き乱れるような、
私は緑の草原の夢を見た、
朗らかに小鳥がさえずる声を。

Und als die Hähne krähten,
Da ward mein Auge wach,
Da war es kalt und finster,
Es schrien die Raben vom Dach.

すると雄鶏があちこちで時を告げ、
私は目を覚ました、
あたりは冷たく暗くて、
屋根ではカラスどもが騒いでいた。

Doch an den Fensterscheiben,
Wer malte die Blätter da ?
Ihr lacht wohl über den Träumer,
Der Blumen im Winter sah ?

一体あの窓硝子に、
花模様を描いたのは誰だろう？
お前たちはきっとこの夢想家を嘲笑っていよう、
真冬に花の夢を見るなんて？

Ich träumte von Lieb um Liebe,
Von einer schönen Maid,
Von Herzen und von Küssen,
Von Wonne und Seligkeit.

私は次から次へと愛の夢を見た、
ただ一人の美しい乙女を、
抱擁と口づけを、
大歓喜と至福の夢を見た。

Und als die Hähne krähten,
Da ward mein Herze wach,
Nun sitz ich hier alleine
Und denke dem Traume nach.

すると雄鶏がまたあちこちで時を告げ、
夢から覚め我に返った、
今私はここにただ独り坐り
見た夢に想いをめぐらしている。

Die Augen schließ ich wieder,
Noch schlägt das Herz so warm.
Wann grünt ihr Blätter am Fenster,
Wann halt ich mein Liebchen im Arm ?

再び目を閉じると、
心はなおも熱く高鳴っている。
窓の花が緑に萌えいずるのはいつ、
愛しい恋人をこの腕に抱けるのはいつだろう？

12. Einsamkeit

孤 独

明るく晴れた大空を流れゆく一片の「翳りを持った雲」とは、自身の投影であり、「晴れた大空」や静穏な「大気」そして「明るい世界」という宇宙的な広がり、ただ一人内なる世界にし、か生きられない自分自身を対比して、主人公は「嵐の中だっってこんなに寄る辺の無い身ではなかった」と慨嘆する。

Wie eine trübe Wolke
Durch heitre Lüfte geht,
Wenn in der Tanne Wipfel
Ein mattes Lüftchen weht:

So zieh ich meine Straße
Dahin mit tragem Fuß,
Durch helles, frohes Leben,
Einsam und ohne Gruß.

Ach! daß die Luft so ruhig,
Ach! daß die Welt so licht!
Als noch die Stürme tobten,
War ich so elend nicht.

翳りをもった一つの雲が
明るい大空を漂っていく、
樅の樹の梢を
かすかな微風が揺らすときに：

そんなふうには我が道を進む
重い足を引かずって、
明るく楽しげな世の中を、
孤独に 誰から挨拶もされずに。

ああ！ 大気はこんなにも穏やかなのに、
ああ！ 世の中はこんなにも明るいのに！
嵐が吹き荒んでいた時だっって、
私はこれほど寄る辺の無い身ではなかった。

1) elend (惨めな) という言葉の語源は、in der Fremd (異国をさすらう) や (故郷を追われた) の意味があり、第一曲「おやすみ」の冒頭の言葉 fremd (よそ者、異邦人) に回帰していくのである。

fremd→elend→Einsamkeitという意味の長い連関が成立する。

2) シューベルトは当初この曲を1番「おやすみ」と同一のd moll (二短調) で書いた (連関) が、24詩の存在を知らながら出版せざるを得なかった第一部の出版楽譜では、h moll (ロ短調) に移調し (短三度下げ)、so elend nicht と2回繰り返されるメロディーは当初同じメロディーであったが、最後の節のメロディーを劇的なものに変更し、第二部への布石としたと考えられる。

13. Die Post

郵便馬車

突如鳴り響く郵便馬車のラッパ（ポストホルン）と遠くから近づく蹄の音とに、旅人の胸は期待に高まり第二部は始まる。「軽快な蹄と元気のよいラッパ」は良い知らせ（去ったあの町からなのであろう）を彷彿とさせ希望を持たせるが、失ったものを取り戻せるわけもなく、旅人は「わが心よ」と空しくつぶやき自嘲の世界へと沈んでゆく。

Von der Straße her ein Posthorn klingt.
Was hat es, daß es so hoch aufspringt,
Mein Herz ?

街道の方から郵便ラッパが鳴り響く。
いったい 何故こんなに高鳴るのか、
我が心は？

Die Post bringt keinen Brief für dich.
Was drängst du denn so wunderbarlich,
Mein Herz ?

郵便馬車はお前に手紙など持って来ない。
なぜお前はそうも奇妙にはやるのか、
我が心よ？

Nun ja, die Post kommt aus der Stadt,
Wo ich ein liebes Liebchen hatt',
Mein Herz !

そうだよ、郵便馬車はあの街からやってきたのだ、
その街には愛しいあの娘がいたのだよね、
我が心よ！

Willst wohl einmal hinüber sehn
Und fragen, wie es dort mag gehn,
Mein Herz ?

お前は きっとはるか彼方に目をやって
あの街がどんな様子なのか尋ねたいのだろうね、
我が心よ？

14. Der greise Kopf

白髪の頭

郵便など来るはずもないと自嘲する旅人である。いよいよ永遠の休息に憧れるなか、自らの頭が霜で真っ白に染まり老人になって墓場も近いと喜ぶが、すぐに元の黒髪に戻ってしまう現実に暗澹とする。憩いは許されず、願いとは裏腹になお生きなければならない生の現実に直面し悲嘆する。

Der Reif hatt' einen weißen Schein
Mir übers Haar gestreuet.
Da glaubt' ich schon ein Greis zu sein,
Und hab mich sehr gefreuet.

霜が白い輝きを
私の髪一面に散りばめた。
もう老人になったかと思い、
私はとても嬉しかった。

Doch bald ist er hinweggetaut,
Hab wieder schwarze Haare,
Daß mir's vor meiner Jugend graut ———
Wie weit noch bis zur Bahre !

だがそれは瞬く間に消え失せ、
もとの黒髪に戻ってしまった、
私は自分の若さにおののく．．．
棺桶にはいるまで、なんと遠いことか！

Vom Abendrot zum Morgenlicht
Ward mancher Kopf zum Greise.
Wer glaubt's ? Und meiner ward es nicht
Auf dieser ganzen Reise !

夕焼けから朝の光が射すまでの間に
白髪になった人がたくさんいるという。
本当だろうか？ 私の頭はそうならなかったのだ
こんなに長い間旅を続けているのに！

15. Die Krähe

鴉

1番「おやすみ」の出立の時に、旅人に寄り添ったのは、ein Mondenschatten（月光に映し出された影法師）であったが、実はカラスが一羽ついてついてきていたのだ。8番で雪つぶてを投げつけたカラスどもの一羽かもしれない。カラスは不吉で呪詛の対象であるが、死に憧れる今の旅人にとっては、墓場まで共に行って欲しいと願い親近感をもつのである。

（実際はカラスがついてきていたのではなく、カラスは旅人の死への観念的象徴なのであろう。即ち、ドッペルゲンガー（影法師）を自らの心に内包し死を見据えている旅人の作り出した黒い影であらう。）

Eine Krähe war mit mir
Aus der Stadt gezogen,
Ist bis heute für und für
Um mein Haupt geflogen.

一羽のカラスが
あの街からついて来ていた、
今日まで絶えることなく
私の頭上を飛び回っていた。

Krähe, wunderliches Tier,
Willst mich nicht verlassen ?
Meinst wohl bald als Beute hier
Meinen Leib zu fassen ?

カラスよ 奇妙なやつだな、
私から離れないつもりなのか？
お前は多分すぐにでもここで餌食として
私の身体を捕えるつもりだな？

Nun es wird nicht weit mehr gehn
An dem Wanderstabe,
Krähe, laß mich endlich sehn,
Treue bis zum Grabe.

もはや長くはないだろう
杖にすがって旅を続けることも、
カラスよ、どうか私に見せてくれ、
墓まで付き添ってくれる誠実さを。

16. Letzte Hoffnung

最後の希望

多くの色づいた葉の一枚に、旅人は自分の希望をかける。願いをかけた一葉を風が揺らすたびに震える旅人であるが、とうとう地に落ちた葉とともに大地に身を投げ出し、希望の墓に涙する。言葉をそぎ落とし同じ言葉を繰り返すことで緊張感を持った詩となっているが、シューベルトは音楽の前半を無調で表し、揺れる葉と旅人の不安な心理状況を表現している。

ここでいうHoffnung（希望）とは、恋人に再び会うという望みともとれるが、キリスト者としての、「恩寵により永遠の生命が得られるという神への信頼」という本義であらう。

Hie und da ist an den Bäumen
Manches bunte Blatt zu sehn,
Und ich bleibe vor den Bäumen
Oftmals in Gedanken stehn.

そこかしこの樹々に
たくさん色づいた葉が見える、
私はそれらの樹々の前に佇む
しばしばもの想いに耽って。

Schauen nach dem einen Blatte,
Hänge meine Hoffnung dran,
Spielt der Wind mit meinem Blatte,
Zittr' ich, was ich zittern kann.

私は一枚の葉を見つめ、
私の希望をその木の葉にかける、
風が私の木の葉と戯れるたびに、
私はあらん限り震えてしまう。

Ach, und fällt das Blatt zu Boden,
Fällt mit ihm die Hoffnung ab,
Fall ich selber mit zu Boden,
Wein auf meiner Hoffnung Grab.

ああ それなのにその葉は大地に落ちる、
希望もそれと共に落ちるのだ、
私自身も大地に身を投げ出し、
我が希望の墓に涙する。

17. Im Dorfe

村 で

深夜である。村にたどり着いた旅人は、犬に吠えられ鎖の軋む音を聞く。村人たちはベッドでぬくぬくとそれぞれの勝手な夢を楽しんでいる。村は異邦人としての旅人を拒否しているのは明らかである。落ち葉とともに自らの希望を葬り去った旅人にとっては、安らぐことは望むべくもなく、眠りこける村人に対し決別の言葉をつぶやく。「私はすべての夢を見果ててしまった。何でここにとどまれようか？」

Es bellen die Hunde, es rasseln die Ketten,
Es schlafen die Menschen in ihren Betten,
Träumen sich manches, was sie nicht haben,
Tun sich im Guten und Argen erlaben,
Und morgen früh ist alles zerflossen.

犬どもが吠え、鎖がガチャガチャと鳴る、
人々はそれぞれの寝床で眠り、
自分たちには叶わぬ多くの夢をみて、
良いことや悪いことで自らを慰める、
だが翌朝には全て消え去ってしまう。

Je nun, sie haben ihr Teil genossen,
Und hoffen, was sie noch übrig ließen,
Doch wieder zu finden auf ihren Kissen.

それもいいさ、彼らは分け前を受け取ったのだし、
残してしまったものを、なお期待している、
枕の上で、またきっと見つけられると。

Bellt mich nur fort, ihr wachen Hunde,
Laßt mich nicht ruhn in der Schlummerstunde !
Ich bin zu Ende mit allen Träumen,
Was will ich unter den Schläfern säumen ?

私を吠え立てろ、お前たち 番犬ども、
このまどろみの時間に私を休ませるな！
私は全ての夢を見終わってしまった、
眠りこける連中のもので、ぐずぐずして
いられるものか？

18. Der stürmische Morgen

嵐 の 朝

潰えしわが希望に涙し（16番）、全ての夢を見果ててしまった（17番）と自覚し、自らの居場所のないことを悟った旅人は、大自然の中暁天を見上げる。嵐の猛威の中で天の衣は切り裂かれ、一面のちぎれ雲が空一面に広がり、雲間からは紅蓮の炎が突き抜けていく。「これこそ、我が意を得た朝だ！」と旅人は勇み立つ。

Wie hat der Sturm zerrissen
Des Himmels graues Kleid!
Die Wolkenfetzen flattern
Umher im mattem Streit.

嵐はかくも引き裂いたことか
天空の灰色の衣を！
千切れた雲が舞い飛んでいく
あちこちへ弱々しく抗いながら。

Und rote Feuerflammen
Ziehn zwischen ihnen hin:
Das nenn ich einen Morgen
So recht nach meinem Sinn!

そして紅蓮に燃えさかる炎が
切れ切れの雲間を突き抜けていく。
これこそ 朝と名付けよう
まさに私の意にかなっている！

Mein Herz sieht an dem Himmel
Gemalt sein eignes Bild,
Es ist nichts als der Winter,
Der Winter kalt und wild!

我が心はこの暁の空に見る
己れの姿が描かれているのを。
それこそ冬そのもの、
冷たく荒涼とした冬なのだ！

19. Täuschung

幻 覚

いよいよ、旅人の精神は追い詰められていく。惨めで、希望を全て葬り去り、全ての夢を見終わった旅人ではあるが、非現実の世界に逃避しあたかも9番の鬼火に誘われたように、自ら怪しい光が綾なす幻覚にその身を委ねるのである。幻覚（まやかし）であっても自分の獲得物なんだ！最後の詩節の一般的解釈「幻覚だけが自分の獲得物なんだ」の意味ではないことに注意が必要。

Ein Licht tanzt freundlich vor mir her;
Ich folg ihm nach die Kreuz und Quer.
Ich folg ihm gern und seh's ihm an,
Daß es verlockt den Wandersmann.
Ach, wer wie ich so elend ist,
Gibt gern sich hin der bunten List,
Die hinter Eis und Nacht und Graus
Ihm weist ein helles, warmes Haus
Und eine liebe Seele drin ———
Nur Täuschung ist für mich Gewinn.

一筋の光が私の周りを親しげに舞う、
私はその後をあちらこちら追いかける。
私は悦び従いながらもわかっている、
光は旅人を誘っているのだと。
ああ 私のように寄る辺のない者は、
幻覚のあでやかな誘惑に進んで身をゆだねる、
それは氷と夜と恐怖の向こうに
明るく暖かい家を見せてくれる
そしてその中の愛しき魂も....
幻覚であっても私には獲得物なのだ。

20. Der Wegweiser

道 標

幻覚にひととき身を任した旅人は、人目を避けて岩山に通じる裏街道を歩いていることに気付く。「人目を避けなければならぬことなど何一つしていないのに、なぜ避けるのか？」自問自答する旅人であるが、路傍に道標が立っていてそのうちの一つだけが我が行くべき道を指していることに気付かされる。いよいよ、「安らぎ」＝「死」が鮮明に浮かび上がってくる。

Was vermeid ich denn die Wege,
Wo die andern Wandrer gehn,
Suche mir versteckte Stege
Durch verschneite Felsenhöhn ?

なぜ私は道を避けるのか？
他の人たちが行く道を、
なぜ私は隠れた小道を探すのか？
雪に覆われた岩山を抜ける小道を。

Habe ja doch nichts begangen,
Daß ich Menschen sollte scheun,
Welch ein törichtes Verlangen
Treibt mich in die Wüsteneien ?

私は何一つ悪いことなどしていない、
だから人目を恐れるようなことはないのに、
なんと愚かな欲望が
私を荒涼の地へと駆り立てるのか？

Weiser stehen auf den Straßen,
Weisen auf die Städte zu,
Und ich wandre sonder Maßen,
Ohne Ruh', und suche Ruh'.

路傍に 道標がいくつもたっていて、
それぞれの街の方角を指している、
そして私は際限もなく歩き続ける、
憩いもなく、 安らぎを求めて。

Einen Weiser seh' ich stehen
Unverrückt vor meinem Blick,
Eine Straße muß ich gehen,
Die noch keiner ging zurück.

一つの道標が立っているのが見える
眼の前で微動だにせずに、
私は一つの道を行かねばならない、
誰も戻ってきたことのないその道を。

21. Das Wirtshaus

旅 籠

たどり着いたところは墓地であった。旅人はここが宿屋だと思い泊まりたいと願うが、すげない宿屋の主人に空部屋はないと追い出されてしまう。ならば、忠実な旅路の杖にすがってまた旅を続けよう！ 眠り＝死に憧れる旅人であったが、拒絶されるのである。

「美しき水車屋の娘」では緑色が希望や恋の象徴であったが、恋敵の狩人の象徴が緑色であることから緑色が最も嫌いな色になった。「冬の旅」では緑色はどうなのであろう。少なくとも旅人は粉ひき徒弟のように自殺はせずに、死と対峙しながらまだ歩み続けている。

Auf einen Totenacker
Hat mich mein Weg gebracht,
Allhier will ich einkehren,
Hab ich bei mir gedacht.

とある墓地へと
辿った道は私を連れてきた、
ここに立ち寄って休もうと、
私は心ひそかに考えた。

Ihr grünen Totenkränze
Könnt wohl die Zeichen sein,
Die müde Wanderer laden
Ins kühle Wirtshaus ein.

緑の葬儀の花環が
目印なのだろう、
疲れた旅人を
ひんやりとした宿屋へと誘う。

Sind denn in diesem Hause
Die Kammern all besetzt ?
Bin matt zum Niedersinken,
Bin tödlich schwer verletzt.

いったいこの宿では
部屋がすべて塞がっているのか？
私は今にも倒れそうなくらい疲れ果てていて、
死ぬほどの重い傷を負っている。

O unbarmherz'ge Schenke,
Doch weisest du mich ab ?
Nun weiter denn, nur weiter,
Mein treuer Wanderstab !

おお 無慈悲な宿の主人よ、
それでもお前は私を追い払うのか？
ならば進もう、先に進むしかないのだ、
私の忠実な旅路の杖よ！

22. Mut

勇 気

今にも倒れそうで心にも大きな痛手を受けた旅人は、それでも、雪が吹き付けたら払い落とす！ 心が何を言っても明るく元気に歌おう！ 嘆くことなど愚者のすること、この世に神がいそうもないのなら、我ら自らが神なのだ！ とカラ元気を出して心の内を隠して明るく振舞おうとする旅人。疎外され、全てに見放された者の精一杯の虚勢であろう。Mut (勇気) は古くはZorn (怒り) の意味で使われたが16世紀以降現在の意味に定着したとのことである。この詩のMutには原義の意味が込められているのではないか。

Fliegt der Schnee mir ins Gesicht,
Schüttl' ich ihn herunter.
Wenn mein Herz im Busen spricht,
Sing ich hell und munter.

雪が私の顔に吹き付けるなら、
私は払い落としてやる。
私の心が胸の内で何か言っても、
明るく陽気に歌ってやろう。

Höre nicht, was es mir sagt,
Habe keine Ohren.
Fühle nicht, was es mir klagt,
Klagen ist für Toren.

私は聞かない、心の言うことなど、
私は聞く耳など持ちほしない。
私は気にしない、心が嘆いたって、
嘆くことなど愚者のすることだ。

Lustig in die Welt hinein
Gegen Wind und Wetter;
Will kein Gott auf Erden sein,
Sind wir selber Götter !

陽気に世の荒波にもまれよう
悪天候などものともせずに、
この世に神がいそうもないのなら、
我ら自らが神なのだ！

23. Die Nebensonnen

幻の太陽

我ら自ら神なのだ！とカラ元気を出した旅人であるが、孤独なことには変わりはない。見上げると空には三つの太陽がかかっている、自分から離れようとしめない。「ああ、私も三つの太陽を持っていたが、良いほうの二つは沈んでしまった。もう一つも沈んでさえくれば....」と願う旅人。実質的な最後の曲である。（24番はエピローグと考える。）

三つの太陽とは何を指しているか？ いくつもの説があるが、キリスト教から由来する、信仰・希望・愛 と考えたい。

Drei Sonnen sah ich am Himmel stehn,
Hab lang und fest sie angesehen.
Und sie auch standen da so stier,
Als wollten sie nicht weg von mir.
Ach, meine Sonnen seid ihr nicht,
Schaut andern doch ins Angesicht !
Ja, neulich hatt' ich auch wohl drei:
Nun sind hinab die besten zwei.
Ging' nur die dritt' erst hinterdrein,
Im Dunkeln wird mir wohler sein.

三つの太陽が空にかかっているのを私は見た、
私は長いことそれらをじっと見つめていた。
すると それらもまたそこに動かずにいた、
まるで私から離れたくないかのように。
ああ お前たちは私の太陽ではない、
照らすが良い、他の人たちの顔を！
そうだ 私もこの間まで太陽を三つ持っていた、
もっとも良い二つはもう沈んでしまった。
三つ目も後を追って沈んでくれさえすれば、
暗闇の中で私はやっと憩えるのだが。

24. Der Leiermann

辻音楽師

村はずれの向こうに一人のライエルマン（辻音楽師としたがライエルを弾く人の意）が寒い中、裸足で懸命に演奏しているが、いつまでも空っぽの皿、誰にも相手にされず犬どもは低く唸って威嚇する。不思議な老人よ、私が一緒に行けばよいのですか？ 私の歌に合わせてライアーを弾いてくれますか？ この老楽師は自身の投影であろうか？ そして、二人はどこへ行くのか？ 虚空に消え去って行く音色は旅人の行く末をいかに暗示するのであるか？ 終わりのない旅に再び踏み出すのだろうか？それとも？

Drüben hinterm Dorfe
Steht ein Leiermann,
Und mit starren Fingern
Dreht er, was er kann,

Barfuß auf dem Eise
Wankt er hin und her,
Und sein kleiner Teller
Bleibt ihm immer leer.

Keiner mag ihn hören,
Keiner sieht ihn an,
Und die Hunde knurren
Um den alten Mann,

Und er läßt es gehen
Alles, wie es will,
Dreht, und seine Leier
Steht ihm nimmer still.

Wunderlicher Alter,
Soll ich mit dir gehn ?
Willst zu meinen Liedern
Deine Leier drehn ?

村はずれのむこうに
ライアー弾きが立っている、
そして かじかんだ指で
懸命に回して演奏している、

氷の上を裸足で
あちこち よろよろしている、
そして 彼の小さな小銭受けは
いつまでたっても空のままだ。

誰も聞こうとせず、
誰も彼に目を留めない、
そして犬どもが唸っている
その老人の周りで、

だが彼は何が起きようと
一切を成行きに任せ、
ライアーを奏でつづけ、彼のライアーは
決して鳴り止むことはない。

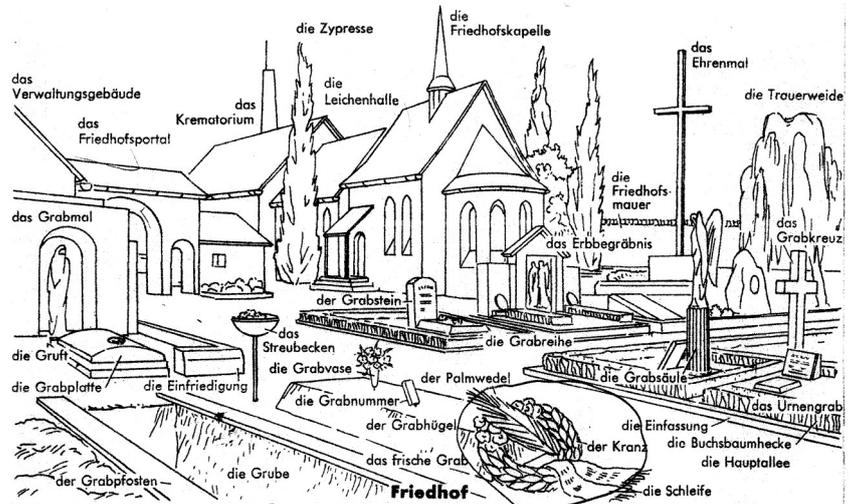
不思議な老人よ、
私が一緒に行けばよいのですか？
あなたは 私の歌に合わせて
ライアーを弾いてくれるのですか？

冬の旅 演奏記録

- 第1回コンサート
1989年 8月20日 @京都 バロックザール
バスバリトン：糸洲義人 ピアノ：斉藤美夏
- 第2回コンサート
1992年 2月22日 @東京 バリオホール
バスバリトン：糸洲義人 ピアノ：吉澤美智子
- 第3回コンサート
2011年10月12日 @横浜 みなとみらい小ホール
バスバリトン：糸洲義人 ピアノ：岡 陽子
- 「冬の旅」を辿って 第一部（解説と演奏）
2015年 5月 5日 @平塚 八幡山の洋館
バスバリトン：糸洲義人 ピアノ：鈴木千帆
- 「冬の旅」を辿って 第二部（解説と演奏）
2015年 7月12日 @平塚 八幡山の洋館
バスバリトン：糸洲義人 ピアノ：鈴木千帆
- 第4回コンサート
2016年 3月11日 @横浜 みなとみらい小ホール
バスバリトン：糸洲義人 ピアノ：杉谷昭子
- 第5回コンサート（Online配信付）
2021年 2月23日 @東京 ガルバホール新宿
バスバリトン：糸洲義人 ピアノ：鈴木千帆



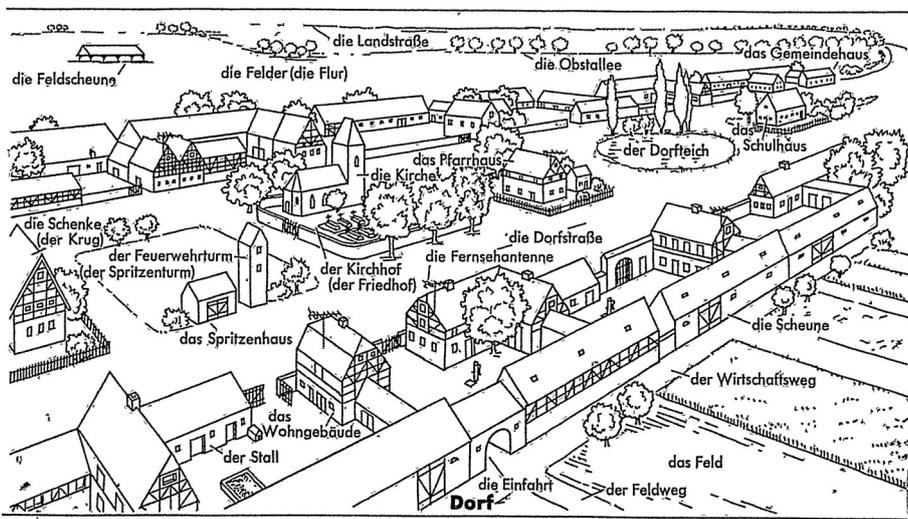
Lindenbaum
西洋菩提樹 or リンデの木



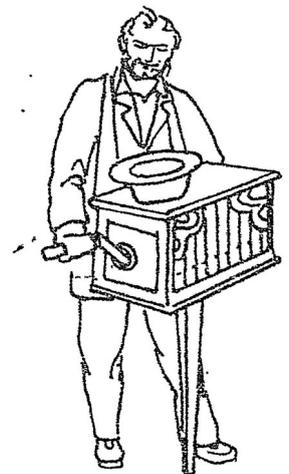
Friedhof (墓地)
21番：Wirtshaus (旅籠)

シューベルト自筆譜

1番 Gute Nacht



Dorf (村)
シューベルト時代



Leierkastenmann

辻音楽師

